

## 機構職員が、学生からの質問に答えました

### 福島高専の文化祭に参加

「スパークチェンバーって何ですか？」

「この水槽みたいな装置がスパークチェンバーで、中にヘリウムガスが充填されています。これを使うと、はるか先で起きている宇宙の超新星爆発や、太陽表面の爆発で地球に降り注ぐ宇宙線を見ることができます」

「どうして光っているの？」

「宇宙から降り注いだ宇宙線が地球の大気に届くと、それが大気中の原子核と衝突して、ニュートリノや電子などを二次宇宙線が生まれます。それらがこのスパークチェンバー内を通る時に、放電が起こるような仕組みになっていて、それが光となって見えます。目に見えない宇宙線が通った跡が見えるわけです。けれどもこの宇宙線は、実は皆さんの体の中も通過しているのですよ」

きらきらと好奇心に輝いたくさんの顔。場所は福島県いわき市にある福島高専。ここで開催された同高専の文化祭にスパークチェンバーなどの実験機材を持ち込んでブースを応援した原子力機構の岩崎真歩と鈴木美穂（写真上は岩崎）は、そんな好奇心にあふれた小中学生や高専生から、しばしば質問攻めにあった。

福島高専は昨年 11 月 3 日、文化祭「磐陽祭」を開催した。原子力機構は高専機構と協力協定を結んでおり、高専内で復興に貢献できる人材育成をめざしている地域復興支援室の企画（ブース）に参加して、さまざまな放射線量測定装置の展示や霧箱で放射線を見る実験などを行った。

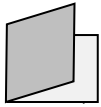
この企画に機構から参加したのは、岩崎と鈴木の 2 人。福島市内にある福島環境安全センターや、福島高専内にある福島廃炉技術安全研究所の職員とともに、このブースを応援するチームを編成して、対応にあたった。

当日のブースへの来場者は、午前中だけで 100 人以上。高専の在学生、卒業生、高専を目指す中学生、それらのご家族、いわき市内にお住まいの方々、さらに原子力関係やマスコミの方々、避難されている方々など、さまざまな方が来場された。

ブースでは高専や機構が準備したパネルをもとに、二人が放射線に関する知識や福島復興に関する研究を紹介するとともに、来場者からの質問に対応した。答えにつまずく場面もあったが、二人の語る言葉は来訪者に親しみを与えたようだ。自然放射線を測定できるサーベイメータや、宇宙線を観察できる前述の装置は、とくに注目の的。また、高専が企画した霧箱の製作では、職員が講師として参加した（写真下）。

岩崎、鈴木二人とも福島高専のOBで、今は福島復興の研究開発に携わっている。岩崎は「放射線に関する内容というのは一般的には難しく理解しにくい内容ですが、説明した私自身が福島県出身で、この学校の卒業生であったことや、年齢が近い世代の方がたくさん来られたこともあり、在校生や卒業生はもとより地元の方々とも対話が弾み、心配されておられることがらには少しですが、お応えできたのではないかと感じています」と、感想を語った。





福島高専は東日本大震災からの地域の復興を支援するために、原子力安全、再生可能エネルギー、減災工学の3分野で、平成25年度から専攻科に募集人員を5名増員した復興人材育成特別コースを設置しました。同高専ではそのほかに社会人特別教育プログラム、再生可能エネルギー関連産業振興、放射線計測支援などの地域復興支援を行っています。原子力機構はこれらのうち、原子力安全の分野における社会人特別教育プログラムなどで連携した取り組みを行っています。